



卓 話



「着物について」

染織研究家 エッセイスト

木村 孝氏

近頃乗り物の中でも着物を着ている人が少なくなりました。しかしこの場でも着物を召した方がいると何となくそちらに視線が動きますのは、やはり民族衣装の強みといえるのではないのでしょうか。日本の民族衣装である着物は外国の衣装とは違う点があります。流行などで多少の違いはありますが、着物は七五三から成人まで、袖があり、身ごろがあるという定まった形という特色を持っています。その為



に色や模様により様々な表現をしなくてはなりません。洋服なら真っ白や真っ黒なものを着てもデザインを変えることにより、色々な場に合った装いになります。しかし着物の場合は形が定まっていますから、真っ白なものを着れば花嫁衣裳、真っ黒なものを着れば喪服に間違えられてしまいます。この様に定型であるが為、古来より日本人は生地の上にとの様な色や模様を乗せようかということに苦心してきました。平安時代ではすべて無地の織物でしたが、それに色を重ねることによりグラデーションの面白さをだしました。江戸時代になると染め出すこと、つまり防染加工を施すようになります。例えば代表的な友禅染めなどは糊を使うことにより、色の混合を防いで模様を描き出すものですし、また絞ることによって染め出す絞り染め等のようなものも出てきて、着物の上に模様を描くおもしろさを追求するようになります。この様に試行錯誤を重ね、技術の上で作る人間の誇りや意地をかけて様々な着物が出来てきました。これは着物の面白いところで、着物の仮縫いをした上に一枚の絵を描くような下絵を描いて彩り豊かに染め上げるのですが、そうした下絵に絵描きが関係します。例えば尾形光琳のような有名なアーティストが手掛けた「光琳小袖」のように、本当の芸術家に絵を描いてもらうといった贅沢さがあるのです。

日本人は長い歴史の中、武士、豪商、豪農そして庶民に至るまで、その人の立場に於いてのプライドを持って、本当に美しい着物を追求してきました。今でいえばブランドの服を買うということになるのでしょうか。洋装のブランドでは上から下までそのブランドで出来ているものを選びたいのですが、着物の場合はまず着物があり、帯があり、そしてこまごまとした帯止め、帯締めといったものを取り揃えて彩りなどを合わせなければなりません。これが上手に出来ないと野暮ということになりますし、彩りを間違えて選択すると年甲斐もなく見えてしまいます。特に帯というものは美術的なものを非常に大切にしたものです。帯は4メートル強ほどありますが、太鼓結びにすれば見えるのは色紙大のお太鼓の部分と前の部分だけです。それだけしか出ない部分にあらゆるテクニクが入っているのです。こういうものを取り合わせ、日本人は大変心をつくして着物を装ってきました。

ここでわたしが恐れていることは、現在日本の着物は日常からあまりにも離れ過ぎていて、女性たちが着物のことを知らずに大人になってしまっているということです。そのため購買者の知識不足により、悪質な売り方をする業者が出てきて和装業界の問題となりました。最近も関西で大きな和装会社の倒産があり、かなりの問屋が巻き込まれましたが、幸いにもプライドの高い歴史ある問屋はこれに巻き込まれずに済んだようです。日本の和装業界も反省点が多いのですが、この様な時代であるからこそ、皆さんが正しく日本の織りや染めの知識を持って、着物を女の晴れ着として利用して頂きたいと存じます。

今の時代、洋装で黒をお召しの方がとても多いと思います。黒は色々なものに合わせやすいのでそれは構わないと思うのですが、少しその習慣に慣れてしまい過ぎたようで、着物の組み合わせとなると配色がわからないという方が多くいらっしゃいます。着物の配色というのは同系統だけでなく、その中に一点違う色を入れるという配色法があります。自分が着物を持っていてもどの様な組み合わせで着たらいいのか分からないという方に、是非自然の季節感等から着物の配色を勉強して頂きたいと存じます。着物はある程度着なれないと着物のほうで着る人を拒否します。今のお嬢さん方は浴衣、振袖といった大変極端な着物にしか袖を通したことがなく、そのところは少し反省して頂きたいと存じます。

着物は昔より女の心を和らげるものだといわれてきまし

た。また少し前の方々にはそういう人が多いと思うのですが、嫁入り道具として着物を持たせるという習慣があったのです。その意味としては嫁ぎ先で困った時に着物があるという安心感を得るという事。そしてもう一つの意味は、自分には冠婚例祭のどんな場にも出て行ける着物があるという、精神安定剤の役割があるということが言えます。そういう意味で昔の母達は何をおいても祝儀、不祝儀の着物だけは用意したものでした。着物は確かに高価なものです。しかしその着物を作る技術や手間、そしてその着物が何年着られるかを考えましたら、決して損にはなりません。もちろん流行等ありますが、私の30年前の着物が現在立派に役に立っているように、基本的な形が変わらない為、着物の生命は大変長いのです。そして組み合わせにより、様々な場に着て行くことができます。さらに仕立て直す、染め直す等、色々なテクニックで再生が出来ます。この様に考えると、初めに投資しておけば利息で食べられるようなものではないかと思うのです。また、例えば祝儀の場では、洋装だと必ずアクセサリーが必要となりますが、着物の場合ですとそれらが必要ではありません。海外などに行くときは、私のような背の低い人間は特にそうですが、やはり日本人ですから一番似合う着物を持っていかないと損ではないかと思えます。この様な事をとりまとめて考えると、着物は決して高価ではないのです。

着物は女性との関わりが多いと思いますが、最近男の方でも着物を見直し、興味を持たれる方が出て参りました。ある方は少し華やかな場に行く時は「着物を

着ていくとサービスが違う」と必ず着物を着て行くそうです。遊び心のある方だと思いますが、皆さん着物を着る時は、是非遊び心を持ってお洒落をしてくださると良いと思います。今までスーツ等はグレーやミッドナイトブルーといったものを着ていらしたのですから、着物を着る機会がありましたら是非派手なものをお召しになっていただきたいのです。またご家族の方が着物をお召しになった時には、必ず誉めてあげてください。そしてもう一度着物というものに目を向け、日本の伝統的な染めと織りの技術と文化を次世代に伝えて頂きたいと存じます。

私は自分の家を継ぐにたって、外国の染色が日本のそれと比べてどのようなものかを知るために、独身時代ヨーロッパとアメリカに渡航しました。その時わかったのは、日本の染色ほど優れた染と織りはないということでした。染料会社の方に聞いたところでは、「染め」というのは色々な染料を使って調合するケミカルの世界であるということです。また「織り」はあらゆる糸を使い、計算して生地をつくる、いわば数学の世界です。こうしたものを日本ではいかに優しい言葉で表現するかということに心を尽くしてきました。西陣ではいまだに織りあがったものを「おきぬ」と呼び、着物に関する美しく優しい言葉が数多く残っています。その言葉一つをとっても、我々日本人にとって懐かしさを感じる着物。機会がありましたら是非今回の講演を思い出して、少し見直して頂ければと存じます。